地球温暖化とガイア理論

最近、気にかかっている一つが、Ｊ・ラヴロックの「ガイア理論」だ。ガイアとはギリシャ神話に登場する女神で、地母神であり大地の象徴とされるが、天をも内包した世界そのものという存在であるともされる。ラヴロックは１９１９年生まれのイギリスの科学者で、ＮＡＳＡのコンサルタントとして火星の生命探査計画に参加したのをきっかけに、ガイア理論を発想したとされる▼大気分析によって火星には生命が存在しないことを実証する一方で、あらためて地球大気の特異性に着目。そして「バクテリアから人間にいたる全生物と、大気や海洋などの環境とが有機的に結びつくことにより、地球が一つの生命体として機能し、進化してきた」という仮説に辿り着く。すなわち地球を整合性のある一つの生命システムととらえようとするもので、地球を「自己調節能力と自己更新能力を備えた、一種の巨大生命体」として理解するものである▼今日も、日本各地で「危険な暑さ」になるとして熱中症への警戒が呼掛けられている。また８月に入って台風三つがほぼ同時に発生するとともに、梅雨末期の如く前線が停滞して西日本を中心に豪雨が続くなど異常気象は甚だしい。２０１５年のパリ協定では「世界の平均気温上昇を産業革命以前に比べて２℃より十分低く保ち、１・５℃に抑える努力をする」とされているが、現実はこれを上回るスピードで温暖化がすすむ。１・５℃と２℃では生じる影響に大きな違いがあり、２℃上昇すれば不可逆的な温暖化に突き進む可能性もあるとされる。つまりガイア理論からすれば地球はあらたな均衡点を求めて自己更新を始めるということになる▼「ガイアにおいて、われわれはこの惑星の所有者でも世話役でもなく、多くの生物種の一員にすぎない。われわれの未来は、たえざる人間的利益のドラマよりも、ガイアとの関係にはるかに大きくかかっている。」ラヴロックの警告が耳に痛い。

（土着菌）